

「花子とアン」フィーバーと向き合って

—史料室からの報告—

酒井 ふみよ

はじめに

2013年6月ごろより、本校史料室はNHK連続テレビ小説「花子とアン」の影響を受けて多忙を極め、ドラマが終わった今も新しい局面での忙しさが続いています。渦中にあった時期に史料室はどのような対応をしたのか、どのような発見があったのか、そして収束を迎えてどのような結果がもたらされたのかを記しておきたいと思います。

学院史料展示コーナーにおける展示：「東洋英和と村岡花子Ⅱ」 2014年3月11日～9月30日

村岡花子に関する展示は、既に2008年11月～2009年3月まで「東洋英和と村岡花子」展示を行っていました。そこで今回は第2回ということで重点是花子の卒業後に置き、『東洋英和女学校五十年史』の編纂や同窓会副会長を務めるなど、彼女が同窓生としていかに母校に貢献されたかを展示しました。またよそで開催される企画展と一線を画して英和ならではの展示を心がけ、同窓会報や「東洋英和新聞」など学内機関誌に掲載された花子の寄稿などを手に取って読めるように工夫しました。拡大コピーしたもの、1枚ずつラミネートしたもの、その他ファイルしたものをショーケース上に置きました。パネル等の制作はこれまですべて手作りしていましたが、この企画展でそれも最後となりました。期間はドラマ放映期間に重ねました。

一般公開であることが初めて意味をなし、150日間で合計6,468名の方が見学に訪れました。期間中は常にといいほど見学者が熱心に展示をご覧になっており、後半が特に多く9月の一日平均はなんと77名でした。バスを仕立てて新聞社などがツアーを組んで見えることも数回あり、フィーバーの熱さに驚かされました。

展示をご覧にいらして、花子の時代におばあ様や親せきの方が在籍されたこととお話くださる方々が時々見え、卒業生の血が脈々と続いていることを感じました。これまで知らなかった卒業生の活躍—美容学校を創立された網蔵妃葉子氏、加茂令子舎監の妹で同窓会副会長でもあった松野志う氏、山梨英和で教えた後、大分

で町議会議員をされた山本琴氏のほか、英語が得意で、家庭にあつて凛とした生き方を貫いた同窓生の方々の姿を教えていただけたことは大きな収穫でした。

アンケートによると、この学院展示によって、村岡花子をはぐくんだ東洋英和の教育の素晴らしさを感じたり、花子の母校愛を知ることができて良かったという方が多く、また卒業生からは母校を誇りに思えたという感想を複数いただきました。中には、英語表記が欲しいという指摘があり、今後への課題となりました。

史料室への照会と対応

1. NHKの番組制作のための質問への対応

……2013年7月～2014年1月上旬

最初に年史類の提供、古い写真の画像提供をしました。その後、具体的に花子の在学当時の学校の様子についてなんでも教えてください、という感じでしたので、特に校舎の造りや女学生の服装、寄宿舎生活など、次々に来る細かい質問には知りうる限り、資料をあさって答えました。

花子の時代は、学校の中に寄宿舎がありましたから、生徒たちは宣教師の先生方とともに一日中キリスト教の教えに従って暮らしていました。ですから、礼拝のこと、麻布教会（現・鳥居坂教会）への出席、当時使われていた聖書やよく歌われていたであろう讃美歌など、中高部の先生にもご相談してお答えしましたが、番組であまり活用されなかったのは残念でした。



学院史料展示コーナー「東洋英和と村岡花子Ⅱ」展

ドラマで強いインパクトのあったミス・ブラックバーンことミス・ブラックモア。“Go to bed!”のセリフは中学生の間でも流行ったそうですが、花子自身や何人もの方々が敬愛を込めて随筆に書き残していたおかげで、実像に近かったのではないのでしょうか。

花子も写っている1914年の絵葉書は大いに活用されました。ただ、カラーではないのでドラマの美術担当者からは、色合いを知りたいと尋ねられても答えられません。様々な方々の思い出の記述に「色」が出てこないかばかり探した時期もありました。

2. 各企画展への対応

……2013年10月～2014年11月

限られた資料をどう提供するか、振り分けに苦慮しました。一部はレプリカを作成して対応しました。簡単に紹介します。

○大田区立郷土博物館：(村岡花子常設展の拡充) 2014.1.25～3.2

【資料貸出28点、画像提供多数】

○ビーンズ：「日加修好85周年記念 モンゴメリと花子の赤毛のアン展」2014.3.27～11月全国のデパートを巡回。(総観客数19万人) 東京は5.21～6.3 日本橋三越本店にて。本校も協賛、生徒・保護者に招待状配布、学院案内パンフレットおよび大学案内をおき、『カナダ婦人宣教師物語』販売委託。展示内容は一般入門編。モンゴメリ、カナダ紹介もあり。

【資料貸出28点、画像提供多数】

○山梨県立文学館：「村岡花子展ことばの虹をかける～山梨からアンの世界へ～」2014.4.12～6.29(入館者3万5千人) 学術的展示。特に花子の短歌に初めて注目。図録が秀逸。【資料貸出39点、画像提供25点】

○弥生美術館：「村岡花子と『赤毛のアン』の世界展」2014.7.4～9.28(入館者3万人) 少女雑誌への花子の貢献紹介が傑出。【資料貸

出26点、画像提供14点】

○教文館：「村岡花子 出会いとはじまりの教文館」2014.5.31～7.14(入場者1万5千人) 矯風会、キリスト教出版との関わり、大正期の銀座紹介に特徴。【資料貸出10点、画像提供24点】

3. 村岡花子関連の個別照会・取材への対応

……2013年6月～2015年7月

【雑誌・TV番組・講演等製作のための取材：16件、村岡花子関連記事校閲(外部)：4件、村岡花子関連画像提供：42件、学院関係画像提供：29件】

「花子」関連書籍、雑誌特集記事のための取材・画像提供依頼、「花子とアン」視聴者一般人からも質問は電話とメールで舞い込みます。たいてい待ったなしです。一日に何件も重なることもあり、調査が必要なものもありましたので、それをほぼ一人でさばくのは本当に大変でした。雑誌、特に週刊誌の場合、信じられないくらい制作期間が短く、締切が迫った中で似たような企画の取材依頼がたびたびあり、雑誌編集の裏方を覗いた感もありました。質問の内容は大体、花子さんはどのような学校生活を送ったのか、東洋英和はどのような学校だったのかというものでした。

画像提供に関しては、2011年から学院の古い写真のデータベース化に取り掛かり、データ検索が可能になっていたのは、我ながら先見の明があったと自負しています。データにしていなかったらお手上げだったでしょう。

4. 本校史料展示に関わる照会への対応

……2014年3月～9月末

展示全般および休館日の案内、道案内。ほとんどが電話で、特に朝日新聞7月26日Around Tokyoに短く紹介記事が掲載された後は連日10件、20件の電話の問い合わせに、仕事が手につかない状態でした。反面、数回催されていた麻布地区の街歩きツアーに1回同行させていただき、本校展示を地域の方々にご案内できたのは楽しい出来事でした。

5. 村岡花子以外の学院の歴史についての照会への対応

特に学内、同窓生からの照会・依頼が倍増しました。「花子とアン」をきっかけとして、学院の歴史に興味を持つようになった英和関係者が増えたことを実感し、これは大きな喜びです。同窓生と教職員に関する、ご親族からの問い合わせも急増、中には情報提供もありました。また、山梨英和学院中学校・高等学校同窓会とも、交流が増しました。



各地で開催された企画展のチケットなど

学院の広報活動への協力

学校案内や、ホームページの特設サイト「『花子とアン』からみる東洋英和女学院」立ち上げ（現在は「東洋英和と村岡花子」に改編）に情報提供、校閲などをして協力しました。ヨコハマ大学まつり（2014年10月4・5日）に「村岡花子と東洋英和」の展覧もしました。

フィーバーによってもたらされたもの

「花子とアン」が放映されなかったら人知れず埋もれる運命にあった一冊のアルバムが、史料室に届けられ、現在展示中です（12月18日まで）。それは、山梨英和時代から花子の親友であった宣教師、ミス・ストラザードのアルバムです。

このアルバムは、カナダ東部ノバスコシアで、ガレージセールに出ていたものでしたが、番組を視聴していた、昔麻布にお住まいだったカナダ在住の女性によって、ここに写っているのは東洋英和女学校の生徒と宣教師ではないか、と気づいてもらえたことから判明し、海をわたって直接届けられたもののようです。卒業式の記念写真や人物のスナップばかりでなく、劇のために扮装した生徒たちや初期の東京女子大学校舎など、写真の保存状態は大変良好です。今この時期に英和にやってくるとは、何か不思議な糸が繋がっていたように思えてなりません。

また、NHKの要望「花子の時代の書籍室の蔵書はありませんか？」に答えて探した、旧高等部図書室蔵書の洋書群の発見も書き落とせません。廃棄されたはずの古い洋書が、大学院図書室の電動書架に眠っていたとは（?!）うれしい驚きでした。「花子とアン」の中でもっと書籍室の場面が欲しかったです。

見学者やそのお知り合いからは、愛蔵されていた「アン」シリーズを数冊受贈しました。

今とこれから

村岡花子が卒業生であることは、英和関係者ならばたいの人が知っていました。しかし、彼女が給費生だったこと、同窓会副会長だったこと、新潮文庫4冊分の英和への印税寄付が今に至るまで継続していることなどは、これまであまり知られていなかったでしょう。ドラマのおかげで、英和関係者自身がもう一度村岡花子の業績に目を向けることになったのです。

「花子とアン」で「村岡花子の母校・東洋英和」の知名度が高まったので、それを広報で活用しようという学内の動きも起こりました。

最初大学のホームページに「東洋英和と村岡花子」の特設サイトが作られ、後に学院のホームページに移されました。面白いページなので、随時トピックスにお知らせを出しながら今後も活用していきたいと思っています。

そして何よりも、村岡家から花子の蔵書を英和に寄贈する、と申し出があったことは重大な局面でした。うかがったときは、うれしさの反面、私たちに託される重い責任にお応えできるか、という重圧で相反する気持ちを味わいました。

お申し出を学院が有り難く受けることとなり、どう活かすかが話し合われました。その一環として展示コーナーの改装が行われ、知的で洗練された空間が生まれました。展示コーナーには、今も毎日一般の方々が熱心に見学していかれます。今後は企画展と連動して何らかのトークイベントができれば、もっと多くの方々に深く理解してもらえる、と夢は広がります。

また、史料室では、寄贈された村岡花子文庫を保管し展示に供するだけでなく、今後の村岡花子研究につなげられるよう、目録作成という将来に向けた作業を始めました。この作業には、卒業生の大学生が関わって下さっています。

そして、これまで悲願であった史料室所蔵資料の目録作成にも予算がつき、取り掛かろうとしています。地下2階の穴倉(?)にもついに陽が射した!と感慨深いものがあります。本学院の歩みは、カナダとの交流に始まり、近代女子教育史、キリスト教教育史の一端を担っています。数年がかりの取り組みになりますが、所蔵資料の目録化などの整備は学術的にも大きな意味があるものです。

村岡花子フィーバーに翻弄された2年間でしたが、なんとか曲がり角を回り、資料整理と活用には光が見えてきました。感謝をもってご報告いたします。（史料室嘱託）



学院ホームページ「東洋英和と村岡花子」の冒頭